東報 四十九

歷史
冊數 五二
記号 一
號數
滋賀縣中學校

210.62
89
Vol 48

正十八

新刊吾妻鏡　卷第四十九

正元二年庚申　四月十三日為文應元年

正月大

一日　己巳晴　垸飯　相州禪室　御沙汰　兩國司　并評定衆

以下人々著布衣出仕列侯庭上之儀如恒

武藏前司　尾張前司

相撲太郎　新相撲三郎

相撲三郎　遠江前司

陸奥左近大夫將監　越後守

彈正少弼　武藏左近大夫將監

毛張左近大夫將監　遠江右馬助

刑部少輔　越前々司

越後四郎　武蔵五郎
遠江七郎　備前三郎
駿河四郎　越後又太郎
駿河五郎　新田三河前司
長井宮内權大夫　秋田城介
中務權少輔　武藤少弼
木工權頭　和泉前司
那波刑部少輔　小山出羽前司
後藤壹岐前司　伊賀前司
長井判官代　日向前司
安藝右近大夫　嶋津大隅前司
上総前司　周防前司

縫殿頭　甲斐守
後藤壹岐新左衛門尉　上総三郎左衛門尉
周防三郎左衛門尉　城四郎左衛門尉
筑前次郎左衛門尉　周防五郎左衛門尉
城六郎　周防六郎左衛門尉
筑前三郎左衛門尉　城弥九郎
筑前四郎左衛門尉　武部太郎左衛門尉
小野寺四郎左衛門尉　大隅蔵人
常陸次郎左衛門尉　小野寺新左衛門尉
上野太郎左衛門尉　出羽七郎左衛門尉
善右衛門尉　和泉六郎左衛門尉
善次郎左衛門尉　薩摩七郎左衛門尉

秋泉七郎左衛門尉　　薩摩十郎
土肥四郎　　内藤肥後三郎左衛門尉
狩野五郎左衛門尉　　伊東次郎左衛門尉
伊勢三郎左衛門尉　　狩野四郎左衛門尉
信濃次郎左衛門尉　　鎌田圖書左衛門尉
肥後新左衛門尉　　大曽祢太郎左衛門尉
信濃三郎左衛門尉　　狩野帶刀左衛門尉
加藤左衛門尉　　紀伊次郎左衛門尉
長内左衛門尉　　大泉九郎
鎌田次郎左衛門尉　　鎌田三郎左衛門尉
進三郎左衛門尉　　善五郎左衛門尉
駿河右近大夫　　平賀四郎左衛門尉

出羽前司行義申時尅拵軍家出羽前司御右衛門督參進上御簾御劔武藏前司朝直御調度尾張前司時章御行騰者越後守實時

一御馬　遠江七郎時基工藤次郎左衛門尉高光
二御馬　武藏五郎時定　安東新左衛門尉
三御馬　出羽七郎左衛門尉行賴　同九郎宗行
四御馬　城四郎左衛門尉時盛　同六郎顯盛
五御馬　伊勢次郎左衛門尉行經

同五郎左衛門尉賴經

其後覽吉書武州令持參給今日有御行始之體仍任例進覽庭上座著例就御點催供奉人其間事以上二藤三郎右衛門尉光泰奉行之平亞左衛門尉

實俊依有故障也未剋御出御車綱廂
御劔役人
武藏前司朝直
御後
五位
相摸太郎時直　尾張前司時章
遠江前司時直　越後守實時
越前々司時廣　刑部少輔教時
遠江右馬助清時　武藏左近大夫將監時仲
陸奥左近大夫將監義政　彈正少弼業時
相摸三郎時利　遠江七郎時基
新相摸三郎時村　越後四郎時方

參河前司頼氏　秋田城介泰盛
信濃前司頼氏　和泉前司行方大夫
小山出羽前司長村　後藤壹岐前司基政
木工權頭顯家　日向前司祐泰
武藏少弼景頼　上總前司長泰
甲斐守為成
六位
城四郎左衛門尉時盛　同六郎顯盛
式部太郎左衛門尉光政　壹岐新左衛門尉基頼
和泉三郎左衛門尉行章
信濃次郎左衛門尉時清
周防五郎左衛門尉忠景

薩摩七郎左衛門尉祐能
一宮次郎左衛門尉康有
筑前次郎左衛門尉行頼
小野寺新左衛門尉行通
加藤左衛門尉景經
土肥四郎左衛門尉實經
小羽三郎左衛門尉行藤
常陸次郎左衛門尉
鎌田三郎左衛門尉義長
鎌田次郎左衛門尉行俊　武藤左近將監頼村
御引出物如例御劔刑部少輔教時砂金左近大夫
將監義政羽宮内權大輔時秀

一御馬　新相摸三郎時村　安保次郎左衛門尉
二御馬　筑前三郎左衛門尉行實
同四郎左衛門尉行光
三御馬　相摸三郎時輔　南条新左衛門尉
二日　庚午晴　堺飯奥州禪門沙汰　御簾左衛門督　御
劔毛張前司時章　御調度越前々司時廣　御行
騰沓秋田城介泰盛
一御馬　新相摸三郎時村
二御馬　備前三郎長頼
三御馬　薩摩七郎左衛門尉祐能
同十郎左衛門尉祐廣
四御馬　信濃次郎左衛門尉晴清

五御馬　周防五郎左衛門尉忠景
三日　辛未晴　埡飯（相州沙汰）　御簾右金吾
御剱越後守實時御調度　左近大夫將監公時御行
騰和泉前司行方
一御馬　遠江七郎時基　糟屋左衛門三郎行村
二御馬　式部太郎左衛門尉光政（同右衛門次郎）
三御馬　出羽九郎宗行（同次郎兵衛尉行藤）
四御馬　城六郎顯盛　同九郎長景
五御馬　新相撲三郎時村
武部次郎左衛門尉光長
九日　丁丑晴　被行評定始
十日　戊寅晴　京都飛脚到著申云今月四日園
城寺三摩耶戒壇事被宣下之處（同六日加刻日吉社神）三基
祇園三基此野二基京極寺一基已上九基神輿入
洛奉振弁陳頭二基者奉振院御所云云
十一日　卯晴　將軍家御參鶴岡
御車（庚）
後藤壹岐左衛門尉基賴　加藤左衛門尉景經
城六郎顯盛　筑前四郎左衛門尉行佐
信濃判官次郎左衛門尉行宗
肥後新左衛門尉景氏
狩野四郎左衛門尉　伊東次郎左衛門尉盛時
薩摩九郎左衛門尉　伊勢三郎左衛門尉頼經
木野寺新左衛門尉行通

一官次郎左衛門尉康有
鎌田三郎左衛門尉義長
平賀三郎左衛門尉維時
以上帶劔直垂候御車左右
御劔役人（布衣下括）
武藏前司朝直
御調度懸（布衣下括）
武藤左衛門尉頼泰
御後
五位（長）
尾張前司時章
越後守實時
遠江前司時直
越前々司時廣

越後右馬助時親
遠江右馬助清時
武藏左近大夫將監時仲
刑部少輔教時
毛張左近大夫將監公時
民部大夫時隆
陸奥左近大夫將監義政
驛正少弼業時
宮内權大夫時秀
小山出羽前司長村
木工權頭親家
秋田城介泰盛
參河前司頼氏
秋泉前司行方
後藤壹岐前司基政
周防前司忠經
伊賀前司時家
上總前司長泰
甲斐守為時
日向前司祐泰
太宰少貳景頼
六位（布衣下括）

相撲太郎　同四郎宗政
同三郎利時　遠江七郎時基
越後四郎時方　新相撲三郎時村
備前三郎長頼　武蔵五郎時忠
式部太郎左衛門尉光政　城四郎左衛門尉時盛
遠江十郎左衛門尉頼連
隱岐三郎左衛門尉行景
伊勢次郎左衛門尉行經
筑前三郎左衛門尉行實
薩摩七郎左衛門尉祐能
土屋七郎左衛門尉行頼
和泉三郎左衛門尉行章
善太郎左衛門尉康長

十二日　庚辰　於濱有御的射手之試被撰定其射手十三人一五度射之

一番
早河次郎太郎　●●●●●○○○○○
澁谷左衛門太郎　●●●●●○○○○○　九　八

二番
平嶋弥五郎　●●●●●○○○○○
豆本新兵衛太郎　●●●●●○○○○○　九　九

三番
佐貫七郎　●●●●●○○○○○　六

藤澤左衛門五郎

四番

藤澤左近將監　六

海野矢四郎　八

五番

桑原平内　八

工藤弥三郎　十

六番

本間弥四郎左衛門尉　七

栢間左衛門次郎　九

七番

工藤八郎　三

十四日　壬午晴　寅刻雷鳴今日有御弓始二五度也

射手十二人

一番

早河次郎太郎祐業　九

澁谷左衛門太郎朝重　七

二番

平嶋弥五郎助經　九

豆本新兵衛尉重方　八

三番

佐貫七郎廣胤　七

藤澤左衛門五郎光朝　九

四番

藤澤左近將監時親　七　五

海野矢四郎助氏　六　六

五番

桑原平内盛時　九　九

工藤弥三郎清光　七　七

六番

本間弥四郎左衛門尉忠時　八　九

栢間左衛門次郎季忠　八　九

廿日　戊子　今日出御所中被定草盡番衆其内

於壯士者歌道蹴鞠管絃右筆弓馬郢曲以下都以

堪一藝之輩於時依可有御要被結番定去比御要

之時無人之間殊以此御沙汰出來仍御小侍兄於

藝能輩月六度之被仰合相州禦門治定云云工藤三

郎右衛門尉光泰奉行之城四郎左衛門尉為清書

定

一番　午　壹番事次第不同　彈正少弼業時

相模太郎　民部權大輔時隆

尾張左近大夫將監公時　秋田城介泰盛

足利上総三郎

同六郎顯盛　下野四郎左衛門尉景經

遠江十郎左衛門尉頼連

筑前五郎左衛門尉行重

武藤左衛門尉頼泰　信濃五郎左衛門尉行宗

澁谷左衛門太郎朝重

二番 丑 未

越前々司時廣　遠江右馬助清時

武蔵五郎時忠　和泉前司行方

出羽大夫判官行有　和泉三郎左衛門尉行章

淡路又四郎左衛門尉宗泰

式部太郎左衛門尉光政

隱岐三郎左衛門尉行景

大須賀新左衛門尉朝氏

佐貫七郎廣胤　江戸七郎太郎長光

大泉九郎氏廣

三番 寅 申

陸奥左近大夫將監義政　相模三郎時輔

備前三郎長賴　小山出羽前司長時

上野大夫判官廣經　大隅修理亮久時

城四郎左衛門尉時盛　周防五郎左衛門尉忠景

寺嶋小次郎時村　筑前次郎左衛門尉行賴

出羽七郎左衛門尉行賴

一宮二郎左衛門尉康有

本間孫四郎左衛門尉忠時

四番 酉 戌

新相模三郎時村　越後右馬助時親

宮内權大輔時秀　木工權頭親家

日向前司祐泰　城弥四郎長景

大曽祢太郎左衛門尉長經　上野十郎朝村
加藤左衛門尉景經　武石四郎左衛門尉長胤
阿曽沼小次郎光經　波多野小次郎宣經
小野寺新左衛門尉行通

五番　頼

刑部少輔教時　遠江七郎時基
新田三河前司頼氏　縫殿頭師連
義作兵衛蔵人家教　城五郎左衛門尉重景
河越次郎經重　筑前四郎左衛門尉行依
甲斐三郎左衛門尉為成　七肥四郎實經
善五郎左衛門尉康家　梶野四郎左衛門尉景氏
二宮弥二郎時元

六番　紀

越後守實時　同四郎顯時
後藤壹岐前司基政　武藤少弐景頼
上総前司長泰

壹岐新左衛門尉基頼　佐渡五郎左衛門尉基隆
薩摩七郎左衛門尉祐能　肥後新左衛門尉景氏
鎌田次郎兵衛尉行俊　蘆谷三郎太郎重村
早河次郎太郎祐業

右守次第各可令參勤之狀依仰所定如件

正元二年正月日

廿三日　辛酉　可禁遏殺罪輩之由有其沙汰被
定事書

一　六齋日并二季彼岸殺生事

右魚鼈之類禽獸之彙重命逾山岳身同人倫因茲罪業之甚無過殺生是以佛教之禁戒惟重聖代格式炳焉也然則件日々早禁魚網於江海宜停猟於山野也自今以後固守此制一切可隨停止若猶背禁遏有違犯輩者至御家人者令注進交名於尼下輩者可加罪科之由可被仰諸國之守護并地頭等但至有限神社之祭者非制禁之限矣

廿六日　壬辰晴　園城寺衆徒使者參著申云今月四日當寺三摩耶戒壇事被宣下之處同十四日山徒院參時訴申云同廿日被召返云剩可燒拂寺門之由山僧蜂起縛已爲朝家勝事一寺滅亡

廿九日　乙未　去廿二日神輿歸坐同廿三日三井寺衆徒分散云云

二月小

二日　庚子晴　將軍家御方遣渡御二棟御所是可被修理御所之故也今日小侍御簡有新加衆和泉前司行方傳仰於越州仍令平亞左衛門尉工藤三郎右衛門申沙汰之

二番　伊賀左衛門四郎　同六郎

四番　美作兵衛藏人

五番　木工權頭

三日　辛丑晴　依山門蜂起園城寺定有火災歟可警固彼寺之由可相觸大番衆之旨被仰遣六波

羅云云

四日　壬寅　出羽判官次郎兵衛尉加小侍御簡衆

五日　癸卯晴　酉剋故豆屋禪定殿下義經公御息女（御年二十）為家明寺禪家御猶子御下著則入御山内亭是可令備御息所給云云

十日　戊申晴　於家明寺御亭將軍家御吉事有其沙汰陰陽師晴賢晴茂宣賢文元依召參入各以別紙奉日時勘文今月十四日壬子次吉三月廿一日戊子上吉云云

十四日　壬子晴　將軍家入御家明寺御亭戌剋姫君御前有御除服之儀天文博士為親朝臣勤御

紋前兵衛佐忠時朝臣候陪膳木工頭親家為役送太宰權少貳頼景奉行之

十八日　丙辰晴　將軍家為覽櫻花御出永福寺

廿日　戊午　廂御所結番更被書改行方書之定

廂御所結番事

一番（自一日至五日）

一条中將　越後守

尾張左近大夫將監　新相模三郎

武蔵八郎　武藤少貳

佐渡五郎左衛門尉　出羽三郎左衛門尉

小野寺新左衛門尉　上総太郎左衛門尉

畠田三郎左衛門尉　一宮次郎左衛門尉

二番自六日至十日

阿野少將　治部權大輔

武蔵左近大夫將監　備前三郎

和泉前司　駿河左近大夫

下野四郎左衛門尉　常陸次郎左衛門尉

城五郎左衛門尉　後藤壹岐左衛門尉

一信濃判官次郎左衛門尉　平賀三郎左衛門尉

三番自十一日至十五日

中御門少將　宮内權大輔

陸奥左近大夫將監　越前々司

秋田城介　駿河次郎

武藤右近將監　薩摩七郎左衛門尉

出羽七郎左衛門尉　弾正少弼

城弥九郎　武蔵五郎

大曽祢太郎左衛門尉　出羽大夫判官

四番自十六日至廿日

讃岐守　信濃次郎左衛門尉

相模三郎　和泉三郎左衛門尉

後藤壹岐前司　狩野四郎左衛門尉

城四郎左衛門尉　民部權大輔

武藤左近將監　足利上総三郎

鎌田次郎左衛門尉

五番自廿一日至廿五日

中御門新少將

遠江七郎

新田琴河前司　兵衛判官代
式部大郎左衛門尉　大隅修理亮
筑前三郎左衛門尉　美作兵衛藏人
壹岐三郎左衛門尉　大泉九郎
六番（自廿六日至晦日）
左条少將　刑部少輔
遠江右馬助　越後四郎
木工權頭　圖書頭
城六郎　周防五郎左衛門尉
加藤左衛門尉　甲斐三郎左衛門尉
上総三郎左衛門尉　土肥四郎
右守結番次第五箇日夜無懈怠可令勤仕之狀所
定如件
正元二年二月日

一日　戊辰天晴　吾妻別當僧正（隆辨）自京都歸
參是依園城寺三摩耶戒壇事去年九月十四日上
洛今年正月四日就令奏達之勅許而山徒及強訴
之間同廿日被召返官府同廿一日寺門衆徒僧正
仙朝法印淨有忠尊以下僧綱三十余輩衆會金堂
疑僉議同廿三日退散云云
十四日　辛巳晴　日色赤將軍家中已御祓為親
朝臣奉仕之薩摩七郎左衛門尉祐能為御使
十五日　壬午　日色赤但天陰紅霞厚之故以入
夜朧月殊晴四条院御在位之時石清水行幸日有

此事云云

十六日　癸未　爲世上無爲御祈禱於御所被始行大般若御讀經云云

十八日　乙酉天晴　於鶴岡八幡宮被修仁王會

廿一日　戊子天晴　風靜戌剌御息所入御先寄御輿於東御亭相摸太郎御亭檜皮寢殿妻戸東御方被參儲相州武州被候之次自同西門平門出御雜色二人取松明前行町大路南行入御所東門侍門經東北庭將軍家於東侍密々御見西土御門中納言花山院中納言一条少將雅有朝臣弾正少弼業時朱工權頭親家相摸三郎時利越後四郎時方前陰陽少允晴宗朝臣等候其所寄御輿於中御所南渡廊

西向妻戸内東御方一条局同前

扈從

相州　雜色二人着直垂者五人已下皆布衣　武州同並　相

武蔵前司朝直雜色二人童一人着直垂者二人　尾張前司時章

左近大夫將監義政同已上相並　相摸太郎殿雜色二人童一人着直垂者五人　相摸四郎相並

此外

大曽祢太郎左衛門尉長頼

梶原太郎左衛門尉景經

對馬四郎左衛門尉宗經　岩間平左衛門尉信重

鎌前四郎左衛門尉行俊

鎌田圖書左衛門尉信俊

伊勢次郎左衛門尉行經
信濃次郎左衛門尉行宗
上総三郎左衛門尉義泰　大隅四郎左衛門尉
以上十人著直垂列歩御輿左右
此外越後守實時就催促奉之處依妻室病悩臨
期申障女坊東御方兵衛佐局周防局自閑路被參
進御饗東御方被候陪膳別當局兵衛佐局周防局
為役送吉時將軍家御烏帽子直衣出御門黄門役御劔相
模太郎殿献御沓給御傳母覆御衾取御沓令退出
給
廿二日　己丑晴　將軍家入御中御所但依為密
儀不及御儲等之沙汰
廿五日　壬辰晴　卯一點大震陰陽道之輩付勘
文於和泉前司行方
廿七日　甲午晴　將軍家御吉事有露顯之義相
別以下人々布衣下括袴候宋尅入御中御處御直衣項之
有進物御劔武州砂金百兩並扇　相模太郎殿南庭置同
扇　相模四郎又女房一条局分砂金三十兩　秋田城介
泰盛持參別當局南庭三宮内權大輔時秀役之此
外騎風流積怙繡御繡等於女房之中又被下細櫃二合各納
怙繡二十疋於刀自等其後將軍家還御寢殿
廿八日　乙未晴　和泉前司行方持參御息所御
服月充註文出御所將軍家覽之
正月分

御小袴二陪織物三陪　御表著二陪織物三陪　重御衣十二襲陪織物　御單　紅御袴　三御小袖　三御衣
二御衣　二御小袖二具　薄御衣　白御衣
御裳　色々御小袖五具　御夜衣　御明衣二
今木二具　御擬一束　御擬拂　御拂
御疊紙　御眉墨　御眉造　御擬
御白粉　御護
二月
二御衣　二御小袖色々御小袖五　御裳
三月同　二月
四月
御袴二陪織物　合御衣五唐織物綾練貫可依事體

更衣御單合御衣　合二御小袖　合御小袖三
紅御袴　御裳三
五月
御小袴二陪織物　御單　御捻重五重唐織物
上二陪織物九　御小袖單重　紅御袴　二生御衣
合御小袖二　御帷五　御裳三　生御夜衣
七月
御小袴二陪織物　御單重二陪織物唐織物九　御小
袖單重　紅御袴　生御衣　御帷七　御裳三
御明衣二　今木二具
九月
御小袴生二陪織物　生七御衣上二陪織物唐織物九　御

單生二御小袖入御錦　紅御袴　二生御衣
御小袖五　御裳三
以上七箇月可為奥州禪門御沙汰
六月
御單重　生御小袖　白御袴　生御衣
御帷七　御裳二
八月
二生御衣　御單　生御小袖　白御袴　生御
衣　合御小袖三　御帷二　御裳二　御明
衣
十月
御小袴三陪織物　八御衣上二陪織物　御單二

御小袖紅御袴三　薄御衣　二御
小袖　紅宿衣色々御小袖五　御裳二
十一月
二御衣　二御小袖　色々御小袖五　御裳三
十二月同十一月
以上五箇月相州禪門御沙汰也
四月大
一日　戊戌　將軍家御吉事已後依可有入道陸奥守亭供奉人事有其沙汰如例召聚人數
記被下御點云云雖被載其記今度漏御點人々
遠江右馬助　越後右馬助
駿河四郎　同五郎

武蔵五郎　同八郎
那波刑部少輔　上総介
周防守　梶原上野前司
伊賀前司　甲斐守
長井判官代　城弥九郎
壹岐新左衛門尉　大隅修理亮
筑前三郎　同四郎
和泉六郎左衛門尉　同七郎左衛門尉
伊勢三郎左衛門尉　信濃判官二郎左衛門尉
武蔵　左近将監
武部二郎左衛門尉　小野寺新左衛門尉
伊賀武部八郎左衛門尉　土肥四郎
伊東二郎左衛門尉

肥後新左衛門尉　薩摩九郎左衛門尉
同十郎左衛門尉　大泉九郎
後藤二郎左衛門尉　相馬五郎左衛門尉
隱岐三郎左衛門尉　平賀三郎左衛門尉
狩野五郎左衛門尉　同四郎左衛門尉
筑前三郎左衛門尉　元自故障有事
武部太郎左衛門尉
鎌田三郎左衛門尉

追加
信濃前司　駿河左近大夫
駿河次郎

服部口數相州之由申仍有沙汰可憚之由被仰出雖無沙汰為武部太郎左衛門尉者可供奉之由退被仰下

二日　己亥　御出事明日也兩武部太郎左衛門
尉外舅於者狹國他界事違期之後遠遠門之間勘
日數禁忌之殘日不幾之處有此御出事仍始者雖
被仰可有憚之間今日有沙汰彼問鶴罡別當申不
可憚由之間可被召具者次以鎌田三郎左衛門尉
可爲光政替之由雖被仰本人出仕之上不及子細
云云

三日　庚子晴　入御于入道陸奥守亭御息所御
同車供奉布衣
土御門中納言頭方卿　花山院中納言長雅卿
二条三位教定卿　中御門少將宗世朝臣
前兵衛佐忠時朝臣　二条少將雅有朝臣

武蔵前司朝臣後御劔　遠江前司時直
越後守實時　刑部少輔教時
越前々司時廣　彈正少弼業時
左近大夫將監公時　左近大夫將監時連
新相摸三郎時村　相摸三郎時利
越後四郎顯時　遠江七郎時遠
和泉前司行方　秋田城介泰盛
宮内權大輔時秀　中務權少輔守教
出羽前司長村　壹岐前司基政
本工權頭親家　參河前司頼氏
太宰少貳景頼　縫殿頭師連
對馬前司氏信　日向前司祐泰

武藤左衛門尉頼泰　下野四郎左衛門尉景經
武部太郎左衛門尉光政
常陸次郎左衛門尉行清
出羽七郎左衛門尉行頼
信濃次郎左衛門尉晴清
周防五郎左衛門尉忠景
上野三郎左衛門尉義長
遠江十郎左衛門尉頼連
伊勢次郎左衛門尉行經
大曽祢太郎左衛門尉祐能加賜左衛門尉京經
薩摩七郎左衛門尉長頼
小野寺四郎左衛門尉道時
鎌田次郎左衛門尉長義
鎌田次郎左衛門尉行俊
相州　武州　前尾州　（雖載供奉散狀稱有所後不候號次）
相摸太郎殿同四郎等豫被參候御所義被在御衣
加等於出居輕衆衣一具御衣指貫小袖十具七御
衣一具（生御單）御小袴紅御袴御小袖十具懸之御
不思酒之後奉御引出物御劔毫張前司時章砂金
越後守實時南庭秋田城介泰盛
一御馬　新相摸三郎時村　武部太郎左衛門尉
二御馬　武藏五郎時忠　淺羽左衛門二郎
三御馬　相摸太郎殿
波多野出雲次郎左衛門尉

御息所御御方進風流 女房中納言正公孫劔
殿上人馬五六位者行騰也
六日 壬寅晴 自去年冬之比時行流布之間可
被祈請之由被仰于諸寺
十七日 甲寅晴 六波羅飛脚樂著申云去十二
日丑魁院御所燒失又山徒以血奉塗神輿之由
同所注進也
十八日 乙卯晴 小臺所格勤侍五人可令著到
之由工藤三郎左衛門尉光蒙平盛左衛門尉實
俊等奉行之和泉前司行方武藤少弼景賴依傳仰
也
格勤

村盟藤五太郎 同藤四郎
村盟孫五郎 龜谷源次郎
入野平太
今日改元詔書到來去十三日改正元元年為文應
元年文章博士在章撰進依御即位也
十九日 丙辰陰 為武藤少弼景賴奉行可被始
行御祈禱之由有其沙汰之處八專有憚之由陰陽
道依勘申被閑之
廿二日 己未晴 於政所被行改元告書亦御祈
禱事陰陽道雖申子細殊被急思食重被經評定今
日始行松殿法印左大臣法印等奉仕之今日將軍
家御御之間及戌剋於御所南庭被修千手法次始

行不斷千手陁羅尼若管別當僧正聖尊率八口伴僧
奉仕之
廿四日　辛酉　御悩事令復本御聞食御膳云云
廿六日　癸亥　將軍家御悩事去夜女房尼左衛
門督局有夢想一人僧告申云依嚴重御病不可入
幕中云云仍今朝彼局語申夢中之間被尋右京權大
夫茂範朝臣之處將軍御居所者稱幕府洪驗炳焉
之由申之
廿九日　丙寅　丑剋鎌倉中大燒亡自長樂寺前
至龜谷人屋云云
卅日　丁卯天晴　今日評議員物事輙不及沙汰
之趣雖被定置麁弱之輩歎申之旨依被聞食及如
先々可有其沙汰云云次訴訟事不叙用三箇度者可
注進所帶之旨可成下御教書云云

五月小

四日　辛未　故武州御門御成敗事不及改沙汰
之間被載式目畢而同時重可有沙汰之由有所見
之輩者不拘此文可有其沙汰仁治三年以後給御
教書逐問答之疑者非沙汰之限今日被定之
十日　丁丑晴　秋田城介入道覺智第三年追福
松下禪尼為施主被修之願文草右京權大夫茂範
朝臣清書本曼陁羅供大阿闍梨日光別當法印尊
家
十三日　庚辰晴　子剋將軍家御祈

十六日　癸未　雨降御惱御祈被行鬼氣并御夢祭等

十八日　乙酉　雨降將軍家御惱令復本御

六月大

一日　丁酉　疾風暴雨洪水河邊人屋大底流失山崩人多為磐石被壓死

四日　庚子　就撿新事今日有被定之条且被仰遣六波羅也所謂

一　國々守護人召進犯科人事

右召進關東無謂任被定置之旨可被沙汰之由可令相觸守護人但寄事於左右守護人致非據沙汰之由訴申之時者可令尋成敗矣

一　可召關東犯科人事

右於訴重科張本者任先例可召進之至輕罪者於六波羅可有尋沙汰矣

一　放免事

右於殺害人者日來十箇年以後隨所犯輕重雖被免之於今度者諸國飢饉之人民病死過法之間以別御計不謂年記無殊子細之輩者至當年所犯者被放免畢焉

五日　辛丑　雨降被行止雨御祈安祥寺僧正良瑜修一字金輪法今日被勅放生會供奉人散狀云

七日　癸卯　雨降未剋霽晴自去月十六日霖雨不休今日適迎晴是偏法驗之所致歟

十二日　戊申　為人夭疫疫對治可致祈禱之由
今日被仰諸國守護人云其御教書云
諸國寺社大般若經轉讀事
為國土安穩疾病對治於諸國寺社可被轉讀大
般若經家勝仁王經等也早仰其國寺社之住僧
致精誠可轉讀之由可令相觸地頭等也只於地
行所者同可令下知之狀依仰執達如件
文應元年六月十二日　武藏守
相模守

其後

十六日　壬子　放生會御參宮供奉人勘記目小
侍被献武州是可令計沙汰給之由也而任例被仰
可進覧御所之旨返遣之云云
十八日　甲寅　被付供奉人記於和泉前司行方
而有被仰出条々所謂云云
可有御息所可御參宮事
相撲太郎　同三郎　元者可為隨兵云云
可為被御方御共者
武藏前司
為供奉人數雖有御合點可參候廻廉者
佐々木壹岐前司
雖有御點今度不可催者
小山出羽二郎
雖無御點可催加隨兵者

十九日　乙卯晴　於濱鳥居邊天文博士為親朝臣奉仕風伯祭御使安藝右近大夫重親令度依御氣色被用舊祭文云云

廿二日　戊午　相摸四郎可著布衣同三郎如元可為隨兵之由云云

廿五日　辛酉晴　酉剋京都飛脚參著自去十五日一院令煩瘧御之由申之

廿六日　壬戌晴　為和泉前司行方奉行以來問（昨酉刻）院御惱事被行御占今月廿六日七日御減之由勘申之其後薩摩七郎左衛門尉祐能為使節上洛依院御惱也

廿八日　丙寅晴　木工權頭親家為使上洛猶被申御惱事之故也

七月小

二日　戊辰晴　京都飛脚到來院御不豫御減之由申之御驗者左大臣法印近衛右府御息云云

四日　庚午晴　入夜雷雨今日三浦武部太郎左衛門尉光政為使節上洛御祈御減事依被賀申也

六日　壬申　為和泉前司行方奉有被尋問于趣後守實時相摸太郎主等事是去年被相催隨兵之時大須賀新左衛門尉朝氏阿曽沼小次郎光經各自由不參而愁以光經者著進子息五郎朝氏者立弟五郎左衛門尉信泰於代官此事許容誰人計哉者實時朝臣等申云以詞令申者傳者若無委細被

露歟退載狀可令言上者則懃狀付工藤三郎右衛
門尉光泰先披覽于相州禪室之處被計仰云載狀
之条頗以似嚴重歟只以光泰實俊等之詞爲行方
謝申之条可宜歟者彼狀云
去年八月放生會御社參供奉人間被仰下兩条之
一　阿曾沼小次郎隨兵役以子息令勤仕申事
右所勞之由押紙于廻文之間言上子細之處以光
泰實俊度々有御尋子細可令勤仕之由被仰下訖
更非自由之計候
一　大須賀新左衛門尉同五郎左衛門尉等間事
右於大須賀新左衛門尉者彼下隨兵御點歟間催
促候之處所勞之由押紙于廻文之注申此旨候
之處現所勞之間御免訖次於五郎右衛門尉者本
自被下直垂御點候之間勤仕訖此兩人事同非私
計候以前兩条如此之由覺語候但胷臆申狀不定
御信用候歟然而如此事先々不及御書下候之間
或引勘愚記或任御點註文言上子細以此趣可令
披露給候恐惶謹言
七月六日　平時宗
進上　和泉前前司殿　越後守實時
七日　癸酉　朝氏光經等間事行方聞光泰實俊
口狀披露云無殊事歟越州等書狀隨禪室嚴命留
中申云云

八日　甲戌　放生會供奉直垂著事為有御點撰
可然之輩可注進之旨去月十六日被御下之間小
侍所令清撰之一昨日進覽之間今日有御點為
令催促被送之云云
十日　丙子　鎌倉中僧詩許可鎮狼藉之旨被下御
教書云云
廿三日　己丑　小侍番帳更清書之雖被仰中山
城前司盛時依申所勞之由依勝民部大夫行轉又
奉仰所染筆也是以和泉三郎左衛門尉行章被下
廂御箱於小侍所廂與小侍每其番自一番至六番不參差
為同日之樣令結番之可書改之由依被仰下如此
云云且清書仁以前兩人可然之旨為相州禪室御計

廿四日　庚寅晴　京都飛脚參著去十五日以後
院御瘧御更發之由申之
廿五日　辛卯晴　依御惱事信濃次郎左衛門尉
行宗為使節上洛今日薩摩七郎左衛門尉自京都
歸參又小侍番帳事有其沙汰於書樣雖為次第不
同之儀何無所思哉尋立次第可書改之由被仰下
云云和泉前司行方武藤少弐景頼等為舉行也是日
來結番之體不云官位不論嫡庶且依宿老且隨勤
否被書云云
廿六日　壬辰陰　京都飛脚又到來去廿一日
門院御産祈禱　軍家御結　崩御之由申之

廿九日　乙未晴　中御所番衆者可著到于廂御
所之旨和泉前司行方奉行相觸工藤三郎右衛門
尉光泰平盛左衛門尉實俊元年午　慰京都飛脚到著
院御瘧病去廿一日平復御驗者道性僧正云今日
御息所入御相州禪室御亭
供奉人
越前々司　刑部少輔教時
毛張左近大夫將監公時　新相摸三郎時村
相摸三郎時村　陸奥左近大夫將監義政
壹岐前司基政　和泉前司行方
出羽大夫判官行方　式部太郎左衛門尉光政
城四郎左衛門尉頼泰
大曾祢太郎左衛門尉長頼
武藤左衛門尉時盛　上総太郎左衛門尉長經
和泉三郎左衛門尉行章
常陸次郎左衛門尉行清
八月大
二日　丁酉晴　武部太郎左衛門尉自京都歸參
五日　庚子晴　申剋甚雨大風人屋多以破損成
尅風休地震
六日　辛丑　相摸三郎外祖父卒之間輕服云
七日　壬寅晴　將軍家頃赤痢病御仍為相摸大
郎殿沙汰彼行如法參山府君祭為親朝臣奉仕之

御使狩野四郎左衛門尉以七日碩德被修七座法
八日　癸卯晴　依御祈
安祥寺僧正松殿法印勝長壽院法印左大臣法印
已下也
十二日　丁未晴　依御祈事為相摸太郎殿御沙
汰一日中被造立藥師像（將軍家御身）并養導師尊家法
印又被始行藥師法今日有被仰遣于六波羅事其
御教書云
同註以後追進狀事不進證文之外於誰陳者不
及沙汰之由被定畢而進覽間同註記具書之時
每度被制進追狀之条違傍例非無沙汰之煩於
自今以後者證文之外不可副進新陳之狀若令
備進簡要證文者遂覆問可令副進彼證文之狀
依仰執達如件
文應元年八月十二日　武藏守
相摸守
陸奥左近大夫將監殿
十五日　庚戌晴　鶴岡放生會將軍家無御參宮
赤痢病御祈不輕之故也武州為御使被神拜舍弟
左近大夫將監義政并相摸四郎和泉前司行方太
宰權少貳景頼壹岐前司基政縫殿頭師連上総前
司長泰等參廻廊
十六日　辛亥陰　武州參宮同時將軍家雖無御參宮
出馬場之儀桟敷等如例大夫判官行有大夫判官

廣經大夫判官行氏等警固馬場

十七日　壬子晴　依將軍家御惱於御鞠壺天文博士爲親朝臣勤如供奉山府君祭鞍置馬一疋鎧弓箭等爲相摸太郎殿御沙汰被奉之御雙紙箱輸入袋自御所被出之

廿日　乙卯晴　將軍家御惱聊令屬減御

廿五日　庚申　依可有二所御參請供奉人等有其沙汰且書於先日御點人數可令注之由被仰小侍所行方傳達之云云宗像六郎子息童形号如意丸點御調度懸可供奉之由被定云云

廿六日　辛酉　雨降將軍家御除服爲親朝臣亥刻勤御移陪膳讃岐前司忠時朝臣布衣役送近江前司季實

九月小

五日　庚午晴　辰刻將軍家御沐浴御驗者醫陰之輩等預祿於鞠御壺有其儀權侍醫長世前陰陽大允晴茂朝直各賜御衣一領御劔一腰坊門三位清基卿直衣取御衣給兩人薩摩七郎左衛門尉祐能引御馬置鞍亦被召彼兩人於中御所給御衣次召爲親朝臣以女房別當局給銀劔一腰松殿法印良基依無用意早出之間被送遣御衣御劔御馬一疋置鞍於伴宿坊和泉前司行方爲御使又於御所被行北斗法七箇日若宮別當僧正舉仕之

十月小

八日　壬寅　小早河侯三郎被召加小侍番帳武
藤少卿景頼傳仰云云
十五日　己酉　相州政村息女頻邪氣今夕殊悩
亂為比企判官女讃岐局靈祟之由及自詫云云件局
為大地頂有大角如火炎常受苦當時在比企谷主
中之由發言聞之人竪身毛云云
廿二日　丙辰晴　貢馬御覧相州武州已下出仕
如例
十一月大
六日　辛未　深栖兵庫助孫平嶋藏人太郎重頼
入小侍番帳和泉前司行方奉仰觸小侍云云
十日　癸酉　明年御的始射手事被差定之相模
太郎殿越後守等被下奉書
十一日　甲戌　二所御參詣事來十九日可被始
之仍供奉人間事可被催促之趣和泉前司行方奉
仰觸申越州并相模太郎殿而彌相雲客事者就為
御所奉行沙汰任例可令行方催促之處加于小侍
奉行事申可被催由之条勅宿德令也已皆所人所
存之間忽被返遣彼公孫等散狀於行方云云其狀云
二所御參詣供奉人間事仰給之趣不得其意候
之間所給之註文等返進候恐々謹言
十一月十二日　時宗
和泉前司殿御返事　實時
十六日　己卯晴　亥剋雷鳴數聲

十八日　辛巳　二所御參詣精進事明日者延引
可為廿一日之由給定仍武州被觸仰其趣於小侍
所周東兵衛五郎為御使又來廿二日御息所為御
見物始御濱出之體密々可令出子小山出羽前司
若宮大路參御除二所供奉人可差進仰宜供奉人
由武州同令下知給云云

十九日　壬午　來廿一日為令浴精進潮御濱出
事御所中御精進御息所明日可出他所給事兩条
有其沙汰供奉人各可為直垂折烏帽子之由被相
觸且所被下御教書也今夕二所御參詣之間步行
供奉人等事於御前有御沙汰新右衛門督花山院
中納言後藤壹岐前司武藤少弼等候其砌云云

廿日　癸未　御物詣供奉之間領狀輩之中一兩
輩有申障事所謂
後藤二郎左衛門尉只今輕服事出來之由申
上総三郎左衛門尉俄所勞之由申

廿一日　甲申　將軍家依可令始二所御精進御
中御所入御陸奥入道亭供奉人
相摸太郎　同四郎重政
同三郎時利　同七郎宗頼
越前々司時廣　尾張左近大夫將監公時
遠江右馬助清時　陸奥左近大夫將監義政
彈正少弼業時　越後四郎時方
木工權頭親家　壹岐前司基政

上総前司長業　武藤少卿景頼
出羽大夫判官行有　武部太郎左衛門尉光政
城四郎影盛　和泉三郎左衛門尉行章
周防五郎左衛門尉忠景　武藤左衛門尉頼泰
信濃次郎左衛門尉時清
大曽祢太郎左衛門尉長頼
薩摩七郎左衛門尉祐能
廿二日　乙酉晴　將軍家被始二所參詣御精進
仍爲令送潮御有出由比浦之間爲御見物中御所
入御于小山出羽前司長村若宮大路之家
御輿
三浦六郎左衛門尉頼盛
遠江十郎左衛門尉頼連
佐々木對馬太郎左衛門尉頼氏（各列步御輿右）
新相摸三郎時村　遠江七郎時基（以上御輿寄）
宮内權大輔時秀　秋田城介泰盛
對馬前司氏信　加賀守行頼
丹後守頼景　城四郎左衛門尉時盛
同孫九郎長景
申剋御出（御手水列參馬）供奉弥相雲客皆著水干其外
武州相摸太郎殿以下者直垂還御之時者公私淨
衣云
廿四日　丁亥天晴　將軍家中潮御濱出
廿六日　己丑晴　玄番頭丹波長世去十五日叙

位四位上仍今日持參彼除書出於御所是去八月
將軍家御惱施醫療之賞也其由有庭付
廿七日　庚寅晴　卯剋將軍家御參鶴岡宮辰剋
二所御進發
供奉人不被注行列
先陣随兵十騎
次御引馬
次御弓袋差
次御甲著
次御唐持
次御小具足持
次御調度懸
次御先達
伊豫法眼教尊
次御駕
後藤壹岐左衛門尉基頼
薩摩七郎左衛門尉祐能
同十郎左衛門尉　周防五郎左衛門尉忠景
上総太郎左衛門尉長經
甲斐五郎左衛門尉為定
大須賀五郎左衛門尉信泰
武石新左衛門尉長胤
隱岐三郎左衛門尉行氏　同四郎兵衛尉行廣
伊東次郎左衛門尉盛時

佐渡左衛門太郎基秀　少
鎌田三郎左衛門尉義長
平賀四郎左衛門尉泰實
葛西又太郎定廣　殺原右衛門尉定仲
鍾田次郎左衛門尉行俊　小河左衛門尉時仲
大泉九郎長氏　平盛左衛門尉實俊
次御剱役人　以上歩行候御馬左右
太宰少貳景頼
次御後
新右衛門督顯方　花山院中納言長雅
讃岐守忠時朝臣　中御門新少將實隆朝臣
二条少將雅有朝臣

陸奥左近大夫將監義政　弾正少弼業時
越前々司時廣　尾張左近大夫將監公時
相摸四郎宗政　越後四郎時方
武蔵五郎時忠　壹岐前司基政
木工權頭親家　刑部權少輔政茂
伊賀前司時家　周防前司忠經
上総前司長泰　出羽大夫判官行方
隱岐大夫判官行氏　甲斐守為成
千葉介頼胤
圖書頭忠茂朝臣　權天文博士為親朝臣
玄蕃頭長世朝臣
安藝右近大夫親經　能登右近藏人俊家

上野三郎國家　阿曇沼水次郎光經
大須賀新左衛門尉朝氏
藤甲圖書左衛門尉信俊
進三郎左衛門尉宗長
後陣随兵十騎
今日相州（政村）被頓寫一日經是息女惱邪氣依比
企判官能員女子靈託爲資彼若患也入夜有供養
之儀請若宮別當僧正爲唱導說法最中件姫君惱
亂出舌低脣動身近足偏似地獄之令出現爲聽聞
靈氣來臨之由云云僧正令加持之後悶然而止言如
眠而複本云云
廿八日　辛卯晴　御舉幣菅根御山衆徒等湖上
浮船迎年甫髮翻迴雪之袖盡歌舞之曲
廿九日　壬辰陰　夜平令詣三嶋社御之舉幣號
天云云
卅日　癸巳　雨降御參伊豆山
十二月小
一日　甲午　雨降巳剋御奉幣伊豆山則御下向
御夜宿土肥彌當所御所歟餉等極美盡善甚雨源
佐之間爲御休息御逗留土肥御
二日　乙未陰　御止宿酒匂驛相模國御家人群
參此所
三日　甲辰晴　將軍家還御于鎌倉御所御奉幣
無爲

十六日　己酉　明年正月御弓始射手等事被差
定之處稱所勞申障之輩相交之間今日於小侍所
被摸太郎殿越後守等經談合自由對揖不可然内
謂之時企參上可申子細之旨被下御教書云又武
州長時頓病辛苦云
十七日　庚戌　梶原上野六郎被加小侍番帳武
藤少弼景賴傳仰於小侍所云
十八日　辛亥晴　依將軍家御願被供養八萬四
千基塔導師尊家法印
廿日　癸丑陰　酉刻御所東侍陁羅尼衆休所爲
飛入御慎之由陰陽道等勘申之
廿一日　甲寅晴　入道右大辨光俊朝臣法名眞觀光親
御息自京都下著當世歌仙也
廿三日　丙辰　小雨降右大辨禪門始出仕和歌
奥行盛也
廿四日　丁巳　寅刻武州病患屬纊氣汗太降云
廿五日　戊午　京上所侍事有其沙汰今日被定
法式
一京上侍事付大番役
諸國御家人恣之錢貨之夫駄賃巨多用途於貧
民等致呵法譴責於諸庄之間百姓等及倦際不
安堵由遍有其聞然則於大番役者自今以後改
別錢參百文此上五町別官駄一疋人夫二人可
支催之於此外者一向可令停止也令定下負數

以後於日來沙汰所之者號此負數不可加增也
一　地頭補任所々内御家人大番役事
先々御家人役勤仕之輩者可為守護催促也
又將軍家明日依可有御方違供奉人事如例以御
點被催之武藏前司尾張前司越後守等者兼可供
催儲御所之旨被觸作訖武州者日來勞越州者心
神聊有違亂之事旨言上云云
廿六日　己未晴　依去廿日鶯怪被行百怪祭今
夜將軍家御方違于相摸太郎殿御亭中御所
御同車八葉
供奉人
刑部少輔教時　遠江右馬助清時
彈正少弼業時　相摸三郎時輔
同七郎宗頼　新相摸三郎時村
越後四郎時定　武藏五郎時忠
宮内權大輔時秀　秋田城介泰盛
壹岐前司基政　木工權頭親家
和泉前司信古　上總前司長綱
武藤少弼景頼　出羽大夫判官行有
隱岐大夫判官行宗　武部太郎左衛門尉光政
城六郎顯盛　信濃次郎左衛門尉清
薩摩七郎左衛門尉祐能　加藤左衛門尉景綱
周防五郎左衛門尉忠景
以上立烏帽子直垂

廿七日　庚申晴　松殿法印良基去八月將軍家
御臨之時御祈賞今月十六日任權僧正聞書今日
到來（兎付御驗者賣五）則參賀御所土御門中納言為申次
廿九日　壬戌　明春正月朔可有御行始供奉人
事可相催之由武藤少弼傳仰於小侍所而為境飯
治仕人々於御所庭上義取座藉所差並札也仍光
參賀後行向其所就札所見註交名進上申下御點
相觸其旨云云

新刊吾妻鏡卷第四十九

外維翰[illegible]踝外走[illegible]之[illegible]為[illegible]小指之次指

當為[illegible]筋引于腰外[illegible]筋其腰中之筋

其意前引于[illegible]後引于[illegible]

即上和肘之季脇[illegible]上乘上引鈌盆[illegible]乳[illegible]維

之筋皆急舉左以之于右其右日必不能開[illegible]木在東也

上過右角並路脉血行左絡于右故傷左角皆自左其而右

右足不能舉所[illegible]左[illegible]命曰維筋相交治之者當以[illegible]鍼

刺之以知為刺之數以[illegible]為俞穴此謂[illegible]

五月[illegible]名[illegible]盆[illegible]